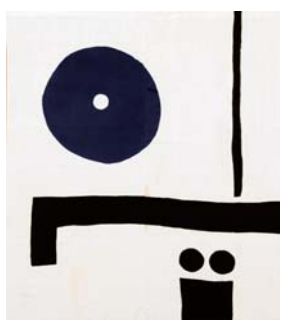


art 63 ful

2020.4
松本市美術館 NEWS [あーとふる]

(2016) 2016年 (日本民藝館蔵)



《無題 2019》2019年



開運堂の広告 (開運堂蔵)

「『いま』を見せたいね…。だから展覧会のタイトルも『いま』としたいんですよ、『柚木沙弥郎のいま』とね。」

去年の夏のこと、展覧会のタイトルを相談すると、柚木は迷わずこう言いました。あと数ヶ月で97歳を迎えようとしていた作家のこのことばに、作家としての気概、展覧会にかける思いを感じ、改めて気を引き締めたことを思い出します。

柚木は型染の染色家・芹沢銈介の作品に感銘を受け、戦後、染色の道に入ります。女子美術大学の教員として勤める傍ら国展への出品を続け、独特な形象を豊かな色彩で染色する作品に多くの人々が魅了されてきました。70歳をすぎたころからは、絵本挿画をはじめとした描画や、さまざまな技法を使った版画、コラージュ、ガラス絵や立体造形なども積極的に手がけています。

旧制松本高校に在学した縁もあり、戦後は民藝運動の盛んになった松本を何度も訪れています。その足跡は、市内の店舗や宿泊施設などに

ART EXHIBITION GUIDE

当館学芸員 武藤 美紀

ある作品や数々のデザインに今もうかがえます。また、旧制高等学校記念館にある水彩画の小品からは、柚木の青春時代の楽しい思い出も垣間見えます。

近年は自宅近くの公園の木々をヒントに「樹」をテーマとした作品も多く、今回の展覧会の見どころのひとつです。樹齢の長さを感じさせる巨大な幹、広幅の布を縫い合わせて表現した抽象的な作品など、型染ならではのデザイン性が発揮されています。近年の作品を主軸とした約80点の作品を、ぜひご覧ください。



《いのちの樹》2018年 (作家蔵)

第28回

ポルカドット号探検記 「鳥獣戯画」のはなし

松本市美術館館長 小川 稔

先日、東京国立博物館で見た弥生時代の銅鐸に稚拙ながら小動物が線刻されていたのが印象に残っている。イモリや亀にトンボ、どれも稲作を始めた当時の人々の周辺の生き物だ。考えればこれらの小動物は今も私達の周囲に生き続けているし、その後の日本美術でも動物モチーフは欠かせなかった。

我が国最初の仏教絵画、法隆寺の《玉虫厨子》腰板には前世の釈迦が飢えた虎の親子に我が身を捧げる場面が描かれていたが、こうした非情な表現は異例で、平安時代末期の《鳥獣人物戯画》のように愛嬌のある擬人化された動物が好まれたのだ。今も人気の絵巻物だが、詞書はなく猿や兔、蛙が野山で遊ぶ姿がそのまま人間世界を連想させる仕掛けがある。モデルとなったのはどれも私達の生活に近く、里山に生息する動物たちではないか。戯画といっても高度な技術をもった専門の絵師たちが描いたにちがいない。闊達な墨線で動物の動作や表情を捉えるだけでなく、岩の凹凸、水流、風にゆれる秋草までを巧みに描き分けている。



《鳥獣戯画》(甲巻)法要、京都・高山寺 ((岩波写真文庫 163)『鳥獣戯画』岩波書店)

実は筆によるデッサン技術は、日本の絵画で最も重視されたものだった。平安時代に濃厚な色彩を用いた絵を「女絵」と呼んだのに対し、こうした線描主体の画法は「男絵」と呼ばれ、絵師の技量の判断基準にもなった。よくいわれるように、これが現代の漫画につながっている。「鳥獣戯画」が生まれたのは「今昔物語集」など人間味あふれる説話の時代。健康な笑いと風刺の精神に共感した昭和の児童劇作家・村山亜土が戯曲を書き、さらにこれにインスピレーションを受けた柚木沙弥郎が今回展示される令和の「鳥獣戯画」を描いたのだ。原作の画中「この喜劇を御覧ください」と言わんばかりに鑑賞者の方に目を向けた桌上に柚木さんは何かを感じたらしい。

RELAY ESSAY VOL.35

日本の書道文化

当館学芸員 大島 武

《万よし》と毛筆で書かれた半紙が当館の事務室に飾られている。整った字形が大小バランスよく紙面に配され、実に伸びやかな一作である。毎年正月、現松本市教育長から真心のこもった書き初めの直筆が、教育委員会所属各課へ贈られるのだ。

「書き初め」は、「吉書始め」、「吉書」ともいわれ、もとは宮中で行われていた行事が、江戸時代に寺子屋の普及に伴い庶民へ広まったとされる。筆を持つことが極端に少なくなった現代においても、学校の宿題であったり、メディア等が主催する書き初め展が各地で行われていたり、日本文化のひとつとして認識されている。

今、日本の書写書道に関わる人々を中心に、わが国の書道文化をユネスコ無形文化遺産へ登録を目指す運動が広がっている。2015年4月に「日本書道ユネスコ登録推進協議会」が発足し、16年9月に文化庁長官へ要望書と署名を提出。提案する申請名称は「日本の書道文化―書き初めを特筆して―」である。他の伝統文化分野でも登録を目指す動きは多い。しかし他国に比べ、すでに登録された件数が多い日本は、ユネスコで審査される機会は2年に1件のみ。昨年、政府が選んだのは、宮大工らが継承する「伝統建築工匠の技 木造建築物を受け継ぐための伝統技術」で、今年秋の審査が待たれる。その次に登録を目指す候補は、過日、23都府県37件の民俗芸能をまとめた「風流踊」を一括申請することに決まった。

日本の書道文化が候補に選ばれるまでの道のりはまだ長そうである。だが、グローバル化が急速に進展する国際社会だからこそ、国民に広く認知される「書き初め」という文化に特筆される日本の書道は、外国人とのコミュニケーションツールともなりうる。この伝統文化を次代へ継承し、世界へ発信していくため、いつの日かユネスコ無形文化遺産へ登録される日がくることを願う。

SAMIRO YUNOKI

97-YEAR-OLD OVER: HERE AND NOW

柚木沙弥郎のいま

2020年4月18日 [土] - 6月7日 [日]

臨時休館の場合があります。開館状況については美術館ホームページをご確認いただくか、直接お電話にてお問い合わせください。

休館日 月曜日 (ただし5月4日は開館)
開館時間 9:00~17:00 (入場は16:30まで)
観覧料 大人1,100円、大学高校生・70歳以上の松本市民700円
※前売券と20名以上の団体、2回目以降の観覧は各200円引き
※中学生以下無料、障害者手帳携帯者とその介助者1名無料
◆大学高校生と70歳以上の松本市民の方の割引適用には、観覧当日、証明するもの(学生証、免許証等)の提示が必要

【ワンコインデー】4月21日(開館記念日)と5月1日(市制施行記念日)は、観覧料が500円
※ワンコインデーの料金は有料観覧者にのみ適用されます。前売券等との差額の返金はできません。ご了承ください。

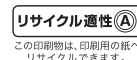
【主催】松本市美術館 【共催】信濃毎日新聞社、SBC信越放送 【後援】市民タイムス、MGプレス

松本市美術館 NEWS あーとふる 編集・発行



松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART

〒390-0811 松本市中央4-2-22
tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
http://matsumoto-artmuse.jp





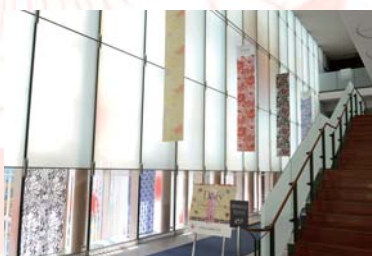
RAOUL Dufy

色彩の画家 Maestro of Colors, Raoul Dufy
Textile Designer Beloved of Parisians
ラウル デュファイ展
—パリジェンヌが愛したテキスタイル・デザイン—

展覧会レポート

1月25日(土)から当館で始まった本展覧会は、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため臨時休館したことに伴い、56日間あった会期のうち34日間の公開となりました。本誌面の展示風景写真から少しでも展覧会の様子をお伝えできればと思います。

展覧会は4つの章で構成されており、第1章は初期から晩年までの代表的な絵画作品、第2章は4章で華やかなドレスを含めたテキスタイル関連作品を展示しました。



《「あらかじめ」》歌

長塚節、平福百穂 画



作者：長塚節、平福百穂 画 作品名：《「あらかじめ」》歌
制作年：不詳 技法・材質：紙本墨書・紙本着色 サイズ：37.8×51.5cm

今回ご紹介するのは、松本市美術館が所蔵する池上百竹亭コレクションの中に収められたアララギ派の歌人の一人、長塚節（1879～1915年）の作品である。

長塚節は、歌人であり小説家としても活躍した。3歳のときには既に小倉百人一首を暗誦し神童と言いつたほど、早くからその才能を発揮していた。家庭環境は恵まれていたものの、病弱であつ

たため茨城中学校（現在の水戸第一高等学校）に進学するも中退を余儀なくされた。病を癒す傍ら、そのすぐれた感受性から短歌に目覚め、正岡子規の門をたたく。子規のところで『馬酔木』の編集同人として活躍する一方、伊藤左千夫とともに『アララギ』の創刊に携わり、歌人としての頭角をあらわしていった。

1910年、夏目漱石の推薦により朝日新聞にて連載した小説『土』が、後に『農民文学不朽の名作』と評価され、節は歌人としてだけでなく小説家としても名を馳せることとなる。

「あらかじめ もてりし雨をことごとく 土にかへして 春は行くめり」

この歌は、病氣療養を兼ねつつ旧所や名跡を訪れながら作歌していた節が、松本で詠んだうちの一首である。子規の写生主義を継承し万葉集の歌風を取り入れた節の歌は、自然を愛しつつも、その深い眼差しで移ろいゆく景色が丁寧に描かれている。添えられた平福百穂の描く雀が、愛らしさとともに憐さを助長する。

病魔に冒され、節は36歳という短い生涯を閉じる。その中でつくられた作品からは、自然に対する鋭い洞察力と、長い闘病生活による死生観や人間への深い愛情を垣間見ることが出来る。

※本作品は2020年5月24日まで、池上百竹亭コレクション展示室にてご覧いただけます。

身近なアート | 当館学芸員 澁田見彰

箱

特別展「柚木沙弥郎のいま」にあわせて、紙の箱作家、梅川茜さんを講師に迎え、型染による紙箱作りのワークショップを開催する予定です。そのこともあり、最近、身の回りの箱を意識するようになっていた。ふと家のかを見渡すと、いくつも箱が置かれている（飾られている？）ことに気づいた。お菓子などの包装箱としての役目を終えたものもあれば、目的を定めず、あくまで「箱」として生み出されたものもある。それぞれに形状、仕組み、素材、デザインなど、作り手や発注者のこだわりが感じられる。

写真は箱好きを自認する家族の持ち物の一部。無論、箱好きとはいえず、箱ならなんでも保管しているわけではなく、どうも箱好き故の選択基準があるらしい。そう、これらの箱たちは熾烈な生存競争を勝ち抜いた猛者たちということになる。にもかかわらず、なんとも慎ましやかな佇まい。とうの昔に去っていったクッキーという主役についていなくても気が遣っているのか、というのは考えすぎか。

箱の中には何も入っていないし、入れる予定も今のところなさそう。言い換えれば、何でも入れられる可能性があるということ。詰め込みたくても、残念ながら容量オーバーのわが身からしてみれば、空き箱の余裕はなんだかうらやましい。

